

6. 審議内容

1) 番組

(1) 事務局より番組説明

今回ご試聴いただきましたのは「おおさか防災スクラム in 箕面」という番組で、箕面市の提供で特別番組として1月17日の「防災とボランティアの日」に放送しました。今年度3回、6月と9月と1月に同タイトルの冊子が広報紙と一緒に全戸配布されています。住宅耐震化を、紙媒体とラジオで啓発するという企画で、ラジオ番組は、9月と1月に放送しました。9月の放送は、地震発生の仕組みにたいへん詳しい寒川旭先生にクイズ形式で地震についてお話いただき、30分の特別番組と1ヶ月間の防災啓発1分CMを放送しました。1月も、番組に加え、防災・耐震化啓発のCMを放送しました。

今回の内容は「防災とボランティアの日」に関連し、震災を体験し、語り部として活動している学生さんのお話を中心に構成しました。当時はまだ幼かった大学生の石田夏樹さんは、これまで学校で震災について取り組む中で、震災のことをもっと若い世代に語り継いでいかないといけないと感じ、いろいろな場所で語り部として活躍されています。今回、ラジオでもそれを発信していただきました。さらに、人と防災未来センターのセンター長で、関西大学で耐震や防災について教えていらっしゃる河田恵昭さんに、防災に焦点を当てて取材したものを併せて放送しました。その中から、今後私たちが取り組むべき耐震や防災を考えていただくという内容です。

(2) 審議

委員長：欠席の委員から、「このような貴重な体験番組は市民に向けた目立つコーナー作りとして定期的に放送してみても」というご意見をいただいています。それでは、委員のみなさんからご意見をお願いします。

委員：30分の構成が良いと思いました。登場人物の人もいいし、進行役も上手だというのが感想です。あと、被災したときにはコミュニティラジオ

が情報源として非常に有効であるということも番組の中できちっと触れていただけたらなぁということと、番組の企画意図が、耐震化につながるとありましたが、それであれば、箕面市の耐震化の補助制度について押さえておくべきだと思いました。

事務局：今回は、語り部の体験談と河田先生のお話を中心に、というのがスポンサー（箕面市）の意向でした。しかし、市の耐震化補助制度についても一言でも入れておくべきだったというのが今の思いです。

委員：30分快く聴いていました。関心が高いテーマでしたが、テーマを別にしても聞き手と語り手のマッチングが良くて、番組そのものとしても良かったという印象を持っています。強いてあげれば、17日が「防災とボランティアの日」なので、学生の石田さんが、辛いことばかりではなくボランティアについて話されていた部分を、もっと膨らませることが出来れば100%に近い番組になったのではないかと。こういう「おいしいテーマ」に対して、いかに関連番組を作ってスポンサーを集めたのかに関心があります。例えば河田さんが耐震金具などの面白い話をされていたので、そこに関連付けてタイアップ・スポンサーを取っていくという考え方が今後は必要なのではないかと思って聴いていました。

委員：進行役がうまく話を引き出せていた。

委員：語り部の被災体験者のかたも大学生ということで声も明るく、内容の割には暗くならず安心して聞けた。それと、タッキーは実際災害が起こった場合どういう体制が取れるのかについても放送して市民に安心感を与える場面があっても良かったのかなと。

委員：30分、退屈せずに、ゆったり、のんびり聴かせていただいた。防災対策イコール震災対策的なコメントが随所にあったが、震災対策は防災対策の一つであって、防災対策は決して震災対策ではない。防災対策は風水害、地震、人災、天災すべて含まれているので、言葉に引っかかりを持った。それと、災害弱者への取り組みについて尋ねたときの河田先生の「防災対策は他人事だと思うな」とか「自分は死なないと思うな」などインパクトのある言葉がところどころにあり良かった。

委員：番組として聞きやすかった。ただ、ひょっと思ったのは、箕面でも被害があったわけで、広い範囲への放送なら別だが、箕面の放送なので、箕面の被害情報も一言あっても良かったのにと。

委員：3点ほど課題も含めて聴いた感想を。1つは制作意図。「若い世代にも身近に聞いてほしい」ということだったが、もうひとつ僕は家族の防災に対する話し合いのきっかけづくりも意図されているのかなぁと思ったが、その場合には放送時間の問題がある。基本的に家族全員で聴いたり若い人が聴く時間帯ではないのが気になった。2つ目、なぜ良い番組なのかというのは、じっくり聴けたということ。静かな語り口でお話されていて誠意が伝わってきた。ところがタッキー全体でみると、音が悪い。中継や取材のときもそうだが、スタジオにゲストを呼んで話を聞く時も、がなるイメージの番組が多い。バランスを考える必要がある。外と中のバランスもそうだし、中でも静と動のバランスを少し工夫していかないとなかなか「常に聞く」という形にならないと思う。3つ目は、コミュニティラジオの役割もあるが、常にタッキーを聞いておいてもらわないと役に立たない。その状態にするためにはどうしたらいいかというのは今後の大きな課題。常にタッキーの周波数を頭に入れてもらう。何かあったときにはすぐチューニングできる場所まで持っていく為にさっきの1つ目2つ目のところも考えてほしい。

委員長：音が一番大事なところですね。そういったことは、機械の設備が悪いのか、それとも技術的なマイクの扱い方などによるものなのか。

事務局：今のお話はパーソナリティの質というふうに受け止めました。

(3) その他番組に対する意見

委員長：1月に地震があり、箕面では大したことはなかったが、テレビでは各地の震度が一斉に出た。ある人から、即タッキーをつけて箕面の状況を聞こうとしたが、一言も触れていなかったと聞いた。タッキーは地震や地

域の情報を流すということのできたのではないのか。

委員：震度1だったらどうしようもない。でも、震度1でしたが心配ありません、と言ってもいいかもしれない。

事務局：深夜早朝など、私たちスタッフが居る時間と居ない時間があります。無人の時間帯に関しては市と消防と提携を結んで有事には緊急で私たちの電波に割り込んで放送するシステムがあります。割り込む基準は、地震の場合は震度4以上、風水害の場合は、雨が何ミリ以上といった規定があります。有人の場合は、震度1でも私たちが放送できるのですが、無人の場合にはそれができない状況にあり、それが現状です。

委員長：有人の場合だったら、震度1でも、こういう状態ですという放送はお知らせするし、できるのですよね。

事務局：はい。

委員長：無人の場合は震度4以上ということで、問題はそこですよね。仮に3とか2だったらだめなのか。

委員：市の防災計画の中で災害対策本部を設置する基準のひとつが震度4です。それがベースになって緊急割込放送の数値が当てはめられていると理解しています。

委員：行政的にはそうだろう。タッキーをいつも聴くというには、ここだけはタッキーが最も体制を整えている、というのが必要。災害だけではない。何かに特化している部分がないと聴かない。行政としてはそうかも知れないが、タッキーとしては本当にそれでいいのか。タッキーの防災の仕組みが我々には見えてこない。マーケティング調査をきちっとしてないのでどこが聞こえない地区なのか、聞こえない地区にはどう対処するのかがはっきりしていない。ここはやっぱりどこかを削ってもここにシフトするぐらいの体制じゃないと私はタッキーの魅力がなくなると思う。

委員長：震度1でも状況は説明しますよ、というのを入れたい。市議会にも、できないは別にして、やっぱり訴えていってタッキーの良さを出して行けたら。結果はどうあれ、きちっと行政へ言ってください。

委員：周辺の状況も含めてどれだけ情報を集めてタッキーとして何をどういうふう発信するのかを、タッキーの使命としてどう考えているのか。例えば瀬川5丁目とか待兼山の方、急斜面で道路が狭くて、高齢者がたくさん住んでおられる。そういうところでタッキーの放送が入らないという場合にどう補うのか、などといった問題。

委員長：これを機会に、タッキー専用ラジオを出していただいたり、情報の協力をしていただいたりすればまた体制が良くなるのでは。

委員：多分、点だけを戦略的に考えるとそうなる。お年寄りが聴く番組を作るとか。スポンサーにとってもおいしい。それが普及すればマスコミとタイアップしてどこかのメーカーに企業の社会貢献として(ラジオの配布を)お願いするとか。個別に考えてはダメ。線で攻略しなければ。箕面市の規模からしてそんな大それたことはできない。

委員：防災と被災があって、被災状況や被災時に何が必要かの情報も必要。防災と被災したときのタッキーの役割というのは全く違うと思う。必要なものは、被災直後と10日後では違う。時間によって必要なものが違ってくるので、その辺りをリアルタイムに知らせるという意味ではタッキーが一番わかり易い。

事務局：無人の時の対応としての緊急割込放送は、市や消防から入れてもらいその間にスタッフが駆けつけて放送できる体制を整える、その第一歩が緊急割込放送。日々課題ではあるが、箕面市との連携の中で、10年かかったがやっと災害対策本部の中にタッキーが入らせてもらって、そこで情報収集して発信できるという連携をとれるようになった。その後の被災状況、どこで何が必要か、といったことに関して情報収集、連携できるように、市内の6団体で「もっとネット会議」というのをもち、市民活動センター、社協、文化振興事業団、国際交流協会、山麓保全委員会、

タッキーでネットワークを組み、互いに必要な情報を取り合うというような連携を取っている。あとは、たくさんの市民レポーターを抱えることで、各地域に散らばっている市民レポーターからその地域の情報を集める仕組みまでは整っている。それをいかに有事の時に使えるか。

委員：例えばいまの「もっとネット会議」で、そういう想定をして訓練したのか。

事務局：一度した。

委員：こういうネットワークは、組まないよりはいいが、それ自身に意味はない。組んだら、どう活用していくか。市民レポーターが何人いるか知らないが、どういう地区に配分しているのか、情報を取れるシステムになっているのか、そのへんが市民に見えないとあんまり意味が無いし役に立たない。やっています、やっています、ではなく、市民に具体的に分かりやすく見せることをしないと。これが良いチャンス。

委員：言葉で言うと、「活動の可視化」。これからのタッキーのポイントだと思う。

委員：具体化の例ですが、私はコーラスをやっているのですが、あちこちに童謡の会が出来ている。夕方、高齢者が一人で寂しくなる時間、スイッチをひねったらラジオから童謡が聴こえてくるとか。5分で良い。毎日5分聴く習慣がついていれば何かあったときにスイッチを押す。その時に、若い人たちの音楽ばかりだと切ってしまうが、懐かしい歌が聞こえてくると、おっ、と聴く。毎日その時間にスイッチをいれる習慣を高齢者が身につけるとすごい武器になる。

委員：そういうことを自らPRする人たちをどうやってつくるか。考えると何か出てくるはず。高齢者に限らずラジオを聴く習慣をつける。

委員：タッキーに対してこんなのやったらどう、というのは多分できないので、会をつくって具体的にこういう形にしては、と出して渡すぐらいでない

と。可視化と習慣化というのははっきりしている。この2つをポイントにやっていくと、いろんなことができていく。それをどう番組に反映させるかはある程度「ファンクラブ」をつくってあげて、アイデアを出していくのがやりやすいのかな、と。

委員：一緒に考えることが必要。要望団体であるうちは聞かない。行政もそう。我々もこういうことをやるからという互いの Win-Win の関係でやっていけばどっかに解決する手がかりはできる。

委員：テレビが映らなくなって、地デジ難民がいっぱい出ると思う。その時はタッキーがチャンス。

委員：スポンサーが箕面市だと市の意向に従うということがあるのだろうが、基本的には聴く人、顧客の立場に立たないと聴き手が少なくなると思う。各外国語を放送する番組があるが、各言語であれだけ長くやられたらほとんどの人がラジオを切ると思う。時間帯を分けて3分の1にするとか何週かに分けるとか。リスナー、顧客に焦点を当てた番組制作をしていないと、どんな理屈を言っても飽きられるのではないか。

委員長：これにて第28回番組審議委員会を閉会致します。
ありがとうございました。

7. 審議機関の答申または改善意見に対して措置および年月日

なし

8. 審議機関の答申または意見の概要を公表した場所における公表内容、方法

自社放送

事務所への備置

ホームページ (<http://fm.minoh.net/>)

上記事項を明確にするため、この議事録を作成する。

平成 23 年 2 月 24 日

箕面 F M まちそだて株式会社 番組審議会